

国定公園・土木学会選奨土木遺産 周遊歩道として再活用

しんりゅう 神龍橋



国定公園帝釈峡は、石灰岩の溪谷が約 18km 続く国の名勝地です。石灰岩の浸食でできた天然橋や洞窟があり、なかでも国の天然記念物に指定された「雄橋」は、全長 90m、幅 19m、高さ 40m の自然の岩橋で、近代橋梁並の規模を誇ります。その成立は、太古に橋の上を流れていた帝釈川が橋の下にできた鍾乳洞の中を流れるようになり、この鍾乳洞を徐々に浸食拡大していったところ、いつしか天井部分が崩落して現在の橋の部分が残って形づくられたようです。渓水による浸食作用でできたものですが、地元では、2 匹の鬼の親分が「橋のかけくらべ」をして競争したけれども、力の差があって負けた方が弟分になったと伝えられています。橋のかけくらべで完成したのが雄橋、中途までが雌橋だということで、この伝説は「芸備国郡志」に原形をさかのぼることができます。

この雄橋から帝釈川に沿って下流へ行くと、大正 13 年（1924）に水力発電ダムによって生まれた神龍湖があります。全長 8km、周囲 24km の湖の東側は広島県庄原市東城町、

西側は同神石郡神石高原町で、神龍湖の由来は上空から見ると龍の姿に似ていることから命名されました。

この湖を横切る県道三原東城線に昭和 5 年（1930）に架設されたのが旧紅葉橋です。戦前に架けられた道路用の単純トラス橋としては、最長スパン（82.9 m）を誇っていました。架設から 50 数年を経て、県道改築に伴い解体される運命でしたが、神龍湖を一巡りできる周遊歩道が計画され、湖を跨ぐ歩道橋として名称も神龍橋に改められ、保存活用されることになりました。昭和 60 年（1985）、移設には全国的にも珍しい工法——ユニフロートによる湖面上の移設で架橋し、既存の探勝歩道と結ばれました。

また、神龍湖を生み出した帝釈川ダムは大正 13 年（1924）竣工で、日本で最も早い時期に建設されたコンクリートダムです。建設当時の高さは 56.4 m で日本一の高さでしたが、80 年という歳月で老朽化が進んだため、補強と洪水吐きの新設で平成 18 年新たな姿を見せました。現存する重要な土木構造物として、日本の近代土木遺産に選定されています。



国定公園に溶け込む歩道橋
旧紅葉橋の幅員は 3.6 m だったが、探勝歩道とするために幅員を 2.0 m、延長 84.0 m で移設された。



神龍橋が架かる神龍湖は、ダム湖百選に選定されている。



選奨土木遺産「神龍橋」（旧紅葉橋）
戦前に架設された道路用の単純トラス橋としては最長スパンを誇っていた。